

# 強靱な脚を持つ者

単久

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

普通の日々を送っていたのに神の手違いによって元の世界から飛ばされてしまった中学生。

元の世界に帰るにはそれなりの時間が必要だという。

その時間つぶしに恋姫の世界に一時転生するになってしまった。

これは恋姫も三国志すら知らない主人公の物語：

※この作品は思いつきで書き始めたもので、どんな物語にするかはあまり決まっておらず、更新も遅くなると思います。ご了承ください。



# 目次

プロローグ	1
新しい家族	5
第3話	9

# プロローグ

『おきてくださーい』

聞きなれない声が頭に響き俺は目をあける。

「知らない天井……すらないですね」

とりあえず辺りを見回すために体を起こす。

『はうあつ！』

「あ、ごめん」

いきなりガバツと立ち上がった俺に驚き尻餅をつく少女。どうやら声の主のようだ。

「大丈夫ですか？」

内心では驚いているのはこつちだなどと思いながらも、とりあえず少女をおこす。

『えと、あの、すいませんでした！』

？なぜこの子は謝る？

いや、別にそんなことに驚いているわけではないのだが。

今、少女は口を動かしていなかった。

『あ、すいません。まだ説明していませんでしたね。ここでは心の中から話しかけるこ

とができますよ。』

『なるほど。理解してないがわかった。で、悪いけどこの上も下も真つ白のここがどこだか知りませんか?』

すると突然申し訳なさそうな顔になる少女。

『とりあえず先に名乗っておきますね。私は玲と言います。あなたを…手違いとはいえここへ連れてきてしまった犯人です。ここは神域のような場所ですね。』

『はい?』

この子…玲ちゃんってイタい子なのか?

『いえ!違います!本当なんです!』

言葉に熱が入ってきた玲ちゃん…ふえ?

『て、ことはマジですか?』

『ええ。すいませんがあなたを正史に送り帰す手続きを終わらせるまで別の外史に一時的に送らせていただきます。』

外史?正史?どういう意味だ?

『正史はあなたが元いた世界、外史は異世界という感じでひとまずはいいと思います。』  
『わかった。ありがとな。』

『いえ、あとは、早々と死なないように何か能力強化しますよ。』

死？

『あなたが外史で死ぬ頃には手続きが完了していると思うので。足、知、腕など、どこでも良いですよ。』

『一応聞くけど死んで寿命でつてことですか？そんなに時間かかる事なの？』  
『言つてませんでしたが？戦争とかある外史ですよ？』

はあ？戦争？

『他の外史はないのですか？』

『残念ですが私ではこれぐらいしか（探するのが面倒で）見つからず…』  
『……思っていることが丸聞声なのですが。』

あ、目をそらした。

まあ戦いたくはないし逃げ足が早い方がいいな。

『じゃあ足で。』

『わかりました。その扉からどうぞ。』

ふりかえると俺の後ろに扉が現れた。

『たのみました。あと、どうも』

『いえ、私の責任ですから。それと』

扉を開けた俺の背に

『御武運を』

『戦うつもりはないのですが…』

俺が苦笑しながら言った瞬間、扉に吸い込まれるように意識を手放した。



## 新しい家族

「おぎゃー（んなこと聞いてないんですけど）」

「…光雅（こうが）は元氣じやのう。おまえの名は旻、真名は光雅じや。ようこそ董家へ」  
「あなたに似た賢そうな子じやないか。ほら光雅、お母さんですよ。月、あなたはお母ちゃんになるのよ」

「おねえちゃん……へう」

ええと、俺は光雅？なのですか？

目が覚めるとアツプで知らない爺さんが微笑んでいるという事態に絶賛混乱中！  
自分の体を見ると現実逃避したくなりますが、どうやら赤子になっっているようです。

となると目の前の爺さんが父親で、その横で横になっっている童顔のおばあさんが母親、その横のまだ2歳か3歳のロリ……ごほん、女の子が姉ですね。

玲ちゃんは送ると言っていたが方法が転生だとか。

つい昨日まで中学通ってた身としては恥ずかしいんだよね。

赤ちゃん言葉しか話せんとか。

とにかくここがどんな所か確認しておこう。

そう思い、寝台の上で立ち上がる。

横を向くと驚いた表情の父さんと目が合う……あ。

まだ生まれたばかりだったのを忘れていました。

そのあとはいろろと大変でしたよ。

パタツと力尽きたように倒れるまねをしてごまかしたけどね。

ほんとに大変だったのはそのあとの赤子のまねごとでした。

何ていう前の事はどうでもいい。

ついでにその後二年ほどもどうでもいいと思います。

いや、聞かないでくれ。

言葉がちやんと話せるようになるまでを思い出すのは、ものすごく恥ずかしい。

そのうち自分なりにここについての情報を侍女さんたちの会話から集めるとわかつ

たことが、ここは漢という国だとか。

あれだよ、漢って邪馬台国とかの頃の中国と習ったような気がするあれですよ。

まあとにかく今俺は五歳となり、だいぶこの世界に慣れてきた。

遊べる場所は広いし、飯も現代に負けず劣らず美味しいし結構昔でもこんな料理があ

つたんだと感心しました。

母さんはよく都に行っていてあまりあつたことが無いですが、父さんや俺、月の誕生

日には帰ってきてくれます。

……ダツシユで。

此の親にして此の子ありつてやつですな。

もう50代でなくなるでしょうに。

そういえば1歳の誕生日のとき、父さんと母さんが洛陽の話をしているのを聞いていて、政治についてつい意見をした。

その時の父さんたちの驚き様はすごかったが、そのあとの行動の早さにはこっちが驚かされた。

城の中に小さな私塾をつくり、そこに特別生徒として入れ勉強を始めるまで約二週間。

建物を建てた兵士さん、お疲れ様でした。

父さんはここ、涼州の太守です。

仕事で忙しくあまり会えていないが、週に一度は一緒に遊んだり仕事や勉強を教えてくださいたり、休みが賊の討伐などでつぶれた時は、いいといつても時間を取ってくれる優しい子供好きな父さんです。

そーいや父さんは董君雅、真名を晴（せい）といい、母さんは池陽君、真名を陽香（ようか）という。

俺の日々は幸せで充実していた。

俺から言い出したことだが、母の時間があまりないので、ちよくちよく仕事を手伝ったり、時間のあるときは月の部屋に入り浸ったり、塾で戦の勉強——は現代人には無理つと投げ出した——や政の勉強など、とにかく楽しかった。

外ではなにやら賊や汚職などで大変らしいですが、まだ子供ということで、涼州内ぐらしいか動きまわらず、俺や母のがんばりもあり涼州は至って平和です。

俺はこんな日がいっまでも続くことを願うのでした。

## 第3話

時が経ち、俺が6歳、月は8歳になっていました。

あ、そんなに経ってないですね。

ある日、俺は月と少数の護衛（護衛と言ってもごっこ遊びで近所の子供10人程がやっているだけ）と、休みの日の楽しみ、野山へ芝刈：じゃなくて、ピクニックに来ていた。

実質護衛がないようなものだが、数人の兵が高台からこちらを見ているし訓練も兼ねてすぐに動かせるよう待機部隊を配置してもらっているので大丈夫です。

華雄がいるからたいいはなんとかなるけど思いますけどね。

「光雅ー華雄さーん。こっちの小川がきれいですよー」

「月ー早く走ると危ないわよー」

ポニーに乗って野を走る月に注意をしながらも、おいてかれないようポニーを走らせている緑の髪的眼鏡娘、賈コウちゃんこと詠。

「みんなー月様の馬に遅れるなー。つづけー。」

走りながら先頭でみんなを指揮する真似をする華雄。

華雄はいろいろあつて、俺も様付けで呼んできたのだが、4歳年上からの様付けはなれない感覚だったので、呼び捨てにしてみらっている。

「「まてー」」

可愛らしい掛け声を上げながら華雄の後ろを行く7歳くらいの仲間たち。

ポニーが無いので走って追いかけているのですが、余り差はひらいていません。

ちなみに俺はその先頭の華雄の隣で走っています。

実はこの部隊の足が速いのは理由があるのです。

恥ずかしながら俺は馬に乗れません。

あるとき月がポニーに乗っていた歳で俺が、いまだ月のとまりを走っていることを、大人に笑われたのが悔しく、そのとき偶然横を走り抜けた伝令の兵の乗っている大の馬を走って追い抜き

「馬に乗れないのではなく、馬に乗る必要がないんです！」

と言い張ったことがあった。

その時の話しが見ていた子供から他の子へと伝わっていき、必死にまねしようとしてポニーに乗る月とその横を走る俺を見かけたたん、町の子達が後を走るといふ光景に。

何度もそんな無茶な走り込みを2年前からやっていたおかげで、あきず、あきらめずに走っていた10人程の子達は鍛えられた兵士と競争できるほどになっていたのだ。

7歳くらいの子供が、だ。

中には俺の最初の友達、華雄を筆頭に兵士も負かすほど早く走る子もいる。

まあ玲ちゃんからもらった足がある俺にかなわないのは仕方が無いのですが、もうすぐ追い抜かれるのではないかと、こっそり走るようになった。

この護衛ごっこ部隊は月が外で遊ぶ年になってから集まりだし、今では週に一度はみんなで遊んでいる。

規則も全員と真名を交換するということだけで、かなりのびのびしている。

この部隊は月に惹かれた子や月の友達が大半だというのは、負けた気がするが気にしたら負けだろう、うん。

まあさておき、日が真上あたりに来た。

水の音もするから水分補給にもちようどいいな。

俺と月が俺らの中ではお約束になっている言葉を言う。

「ではお待ちかねー」

「「おきゅーりょー」」

待っていましたとばかりに、みんなが思い思いに座り込む。

ごっこでお給料などといったっているが、実際は俺と月の手作り弁当対決なのです。

つまりランチタイムでもある。

俺の趣味の一つが料理であり、その影響か月もかなりのレベルになっている。特に月の出すお茶は格別です。

どうして同じお茶っ葉であんなに味が変わるのでしょうか？

皆に半人分の弁当を月と俺が、それぞれに手渡していく。

食事時間、休憩時間が終わったら投票だ。

「詠ちゃん。お水汲んでくるね。」

「わかった。木が多いし一応気をつけてね。」

「だれか腹ごなしに勝負しないかー」

「華雄さん対俺たちごにんしゅー」

「な!? 一対五はズー」さいきよーの華雄姉さんならかてるよー」ふはははは、いつでもかかって来い！」

皆、思いいいに過ごしている。

「みんなー休憩時間は終わりだー。おや、月様は？」

半刻ぐらいたって最年長の華雄が号令をかけた。

「大変。月が川の方から戻ってきてない！」



「何だ?!? 全員ここで待っててくれ。私が見てくる!」

「俺も行きます! 詠さんは皆を兵士さんたちの所へ!」

「僕たちも戦「それはいかん!」 かゆうさん…」

「詠! 後は頼んだぞ!」

「わかった。こっちは任せて。華雄は月のこと、頼むわよ。」

走りだす華雄と俺。

姉ちゃんに何もなければいいのですが……